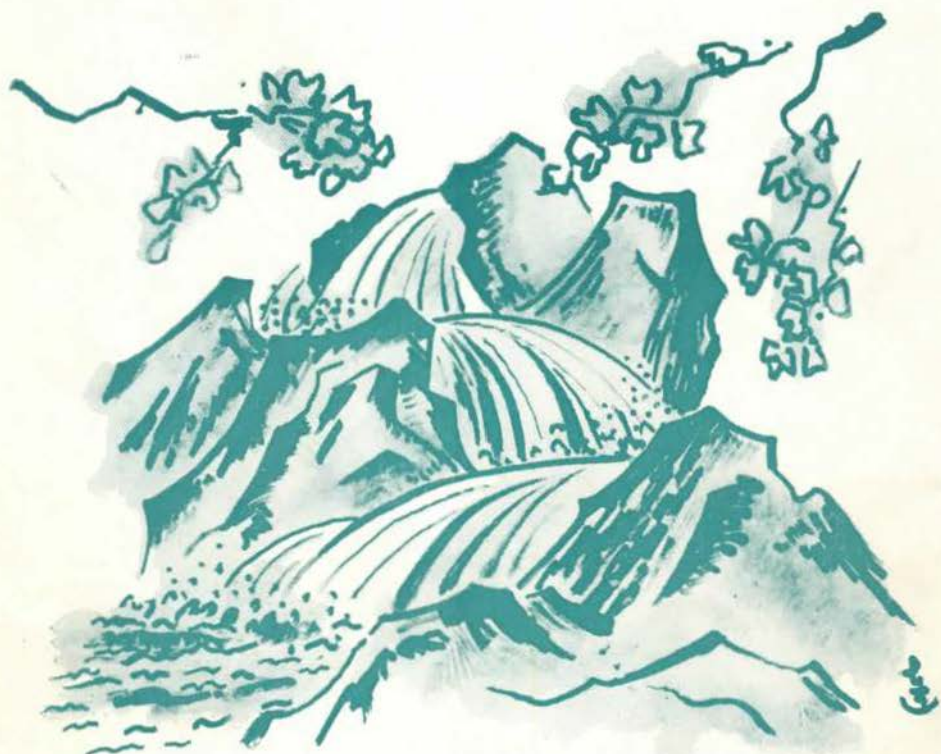


浄土

八月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿三日 三刷郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(投函券第三五二号)
昭和四十三年七月二十五日 印刷
昭和四十三年八月一日 發行

第三十四卷

第八号



い の ち の ふ れ あ い

かたみ子や母がくるとて手をたたく

一茶

盛夏がつづいているが、地方では、八月のお盆の行事がおこなわれる。都会や、郷里をあとに遠くで働いている人たちが、一年にいちど、なつかしいふる里に帰るときである。最近では、昔ほどに、そういう意識も少ないかもしれないが、でも、ご先祖さまのみたまが、おうちへ帰られるお盆に、家族がそろってお迎えして、団らんするという気持ちは、現代においては、大事にされなければならない。

人間の心と心のふれあいが欠如し、人間自体が疎外されているとき、亡き人と、生きているものが、たましいといのちのふれあいを通して、生きることのありがたさを感ずることは、もったも大切なことであり必要なことである。

送り火にむせび侘びしい父の顔

極楽へつとめてはやくいでたば

身のをはりにはまいりつきなん

法然上人御歌

—目次—

表紙「溪流」松濤達文画

- お供茶……………佐藤 治子…(2)
あるべきようは……………大南 竜昇…(6)
インド・ネパールの旅④…戸松 啓真…(10)
お歌をいただく……………(16)
維持のころの人たち②……大橋 俊雄…(17)
占いと念仏②……………川上 法俊…(20)
読者の声……………(23)
隣人＜数珠物語＞……………合田 微雪…(42)
旅……………大谷 学…(26)
和訳三部経 仏の光明・浄土の莊嚴
……………村瀬 秀雄…(28)



お供茶



— 佐 藤 治 子 —

「雨が降りませぬように」と、念じつづけてきた日が来た。それは六月二日のことであつた。伝説に由ると、四百年前にお堂が津波に流されたという、それより「露座の大仏様」として三百有余年、風雨の中、或いは澄み切った青空の下に緑の木立に囲まれて居られるその大仏様に御供茶の式が行われる大事な日であつた。

これは裏千家の淡交会という会が鎌倉に支部を創立され、発会式の記念行事として大仏様に裏千家御家元の鵬雲斎千宗室宗匠御自身で「供茶」をされるという、記念すべき式典である。淡交会は全国に数百万もと、数え切れぬ会員を持つ大きな、有力な会である。役員方は日が近づくにつれ、準備に忙殺されていた。

明治神宮・靖国神社等各神社にて行なわれるのは「献茶」といい、寺院の御仏前にて行なわれるのは供茶と称される。私は総本山知恩院の御本尊前で、丁度先代宗匠が御供茶をされた日に参拝した事があり、中々こういう御縁に恵まれる事はないと、一人感激して相親した思ひ出がある。

大仏様の前の香爐を中心に、式場を囲むように左右にテントを張り、椅子をならべ、来賓の席、そして大勢の参列者の席が設けられた。

大仏様の前には鉄線をたくみに生けた一対の献花、果物、

そして茶席を持たれる各茶室の庵主より、当日もてなしの御菓子を種々盛り合わせ供えられた。香爐を境に、台上にひかれた畳二枚を縦に長く置き、その末座に畳の台を一枚横に敷き、その端に一段低く「水谷」が設けられた。

上座に「真台子」を置き、お供茶のお道具一切が置かれてある。

特別の来賓としてアメリカ大使館より参事官達と夫人方、在日米海軍司令官、西太平洋米海軍空軍司令官夫妻、横須賀基地司令官夫妻、第七艦隊潜水艦隊司令官夫妻達を来賓席へと案内すると、早や一般会員、参会者席には美しく着飾った婦人達が約六百名きちんとこしかけて居られる。

何か式典があると住職と私を招待して下さる御礼にと前記の外国の方々に御招待状を出すと、初めて拝見するこの「供茶」とは一体どういう事をするのであろうか、失礼のないように、どういう服装で行くべきか等、アメリカの方々より電話にて問合せがあった。

「私達、日本人は紋付、裾模様、或いは無地紋付を着ます」と、いうと、

「それでは帽子、白手袋の礼装をして行きましょう」と、行届いた心くばりである。

美しい色とりどりの和服の会員達の席の前列に帽子をかぶ

り、白手袋をつけて席へつかれた外人の夫人達の様子は華やかである。

午前十時。緑の木々の間を縫い導師にさしかける赤い傘が見えて来た。柄香炉を持った引僧を先頭に導師、出勤のお坊様方、そして宗室宗匠が静々と進んで来られる。

さっと外国側来賓は立たれた。私の胸はシュンと引きしまる。近くにこしかけて居られた日本の婦人等が「私共も立ちますか」とささやかれた。「いえ、よろしいのです。外国の方々の習慣ですから」と急いで答え、私は立ちあがった。予期しないことであつたが、これはジョンソン司令官夫人の申し出であつたのである。というのは、あちらのならわしでその日の主なる方が入場される時、全員が起立し、お迎えするので、この日も僧侶方と宗匠の入場に敬意を表し、起立されたのである。私は嬉しかった。

非常な敬意を払われたこの事はとっさの行動であり、案内係の私もこれに習い起立し、僧侶方が仏前に進み、宗匠が畳の下座に着席されるのを見て、一行は静かに着席したのである。日本の方からみたら、異様な事に感じられたことと思う。けれど、外国人側来賓の態度がどんなに尊敬を払われていたか分るのである。

台子より遙か下座に座られた宗匠が泌々として大仏様を仰



裏千家家元千宗室宗匠による御供茶の模様

も足音をしのばせているのか、あたりの静けさに知らず知らず心が引きしまる。

読経がすみ、控えの席につかれる僧侶方と、同時にすうつと立たれた宗匠は足さばきも美しく、上座の真台子の前に進まれ着座された。参列者の眼は一せいに宗匠にそがれる。台子の前には御供茶に使用される御道具が畳にふれぬように

がれ、深々と
礼拝される様

子はあたりに
人気がなく、た

だ仏様と我一
人の境地にい

られるかの如
きであった。

僧侶方の読

経、導師の表

白を読みあげ

る声に大仏様

のまわりはし

ゆんとして、

一般の参詣者

と白い布が敷かれていた。

手をつき一礼され、おごそかに御点前の作法が次々と進まれていく。御茶碗の茶せん通しが済まされると、やや御自体を向けられ、ワトコロより白いマスク（覆面と称される）を出され、御口の所へかけられる。そしてお茶碗をふき、御茶を点てられるのである。御仏様に供えられる、そのお茶に息がかからぬようにと心くばるのである。そして「へぎ板」と称される四角の薄板でお茶碗にふたをされ、用意されていた草履をはき、仏前へと進まれ、高い台の上に供えられたのである。また戻られて、今度は薄茶を点てられ、再び御仏前へ供えられ、深々と拝礼された。動作一つ一つ細心の心くばり。流れるような美しい御手の動き、大ぶりの御動作は特に大仏様の前、しかも野外にての御供茶の事故、すべて大きく動作されるよう御心をくばられたそうである。宗匠も大仏様の前で、しかも野外にて勤められる、この御供茶に感銘を深くされて居られ、身心共清らかな御様子で、お堂のない樹木に囲まれ、座し給う大仏様の前へと進れたのであった。また「水谷」にて控えを勤められるのは「業体」という役職の御二人の大先生方であった。

宗匠の御心、そして当日出席された一門の方々の御心は、ただ一条に大仏様へと向けられていたのである。

島にかこまれた平地に御仏像が造られ、明治時代から境内拡張に努力し、大正十二年には大震災で御台座破損。戦時には参拝された人は兵隊さんばかり。住職は応召したし、戦後はガラリと変って、アメリカ兵ばかり来たという大仏様のまわりは種々変っていった。ようやくにして境内の姿もとのい、参列される人達も落ちついて来たこの頃、この長年の精神、物質両面にての苦勞を大仏様を中心に、今日まで過して来た私達にとり感慨は一沁であった。

「今日のこの盛儀、大仏様おうれしでしょう」

と、御仏様に話しかけたき思いの私は涙がみにじみ出て、幾度か目をつぶって、

「大仏様、大仏様」

と、お念じていたのである。

大震災の後、「こわし屋さん」が倒かいした書院をかたづけるあの泥くさを思い出し、仮の書院の壁の一コマを「壁屋さん」に教わり、手伝った事等を思い出し、この喜び、感激は人には一寸分っていただけぬと思う。

大仏様一すじにと、専心御供茶のお点前をされる宗匠の御心持は、私には私なりにひたひたとせまってくるものがある。当寺にとり、初めての御供茶式である。心一つにして今日を待ったのであった。

支部創立発会式に關して努力された関係者の先方、理事さん方、そして茶席を持たれた方々も、

「立派な御式でありました。照り過ぎもせず、風もなく、御供茶日和でした」

と、皆さんよろこび合っていたのである。

一ヶ月過ぎた七月二日の朝、六時前にいつものように、人氣のない時にお線香をあげながら、やがてお経を上げて出て来る住職の玄關の戸を開ける音を聞きながら、

「大仏様、どんなに満足なさったことでしょう。私達も嬉しゅうございました」

と、一本々々お線香を供えながら、一ヶ月も過ぎた今、未ださめやらぬ、いやいつまでも忘れられぬ感激にひたっているのである。ポツポツと、また雨が降って来た。お線香の煙は静かに立ちのぼって行く。

一 取次書籍一

故真野正順 著

「無量寿経講話」

B 6 版四一〇頁

定価 五三〇円 送料 七〇円

~~~~~  
本会にてお取次ぎいたします

# あるべきようは

大南龍昇



(1)

東京のある浄土宗のお寺で、隨身する四人の青年僧と住職さんを囲んで、仮名法語を輪読することになり、私もそのメンバーに加えて載くことになった。

テキストは、岩波の日本古典文学体系の「仮名法語集」(宮坂宥勝校注)を使うことにした。始めるに先立って、みんなで次の様に相談した。

できるだけ本文を忠実に読むこと。そして一節一節をみんなですべて自由に考え、意見を交換し合いながら読み進んでゆくこと。それが、住職さんからの大きな要望でもあったからである。

ところで、仮名法語には、次のような特色が見られる。

第一に、カナモジ法語には、仏教が民衆を対象とし、民衆の生活に即した倫理性をもって示されていること。そしてカナモジをもって平易に説かれた仏教の教理は、専門学僧の行った難解な経論の研究とは別に、民衆の間に深く浸透していったということ。

第二には、著者の潑刺たる意気と人間としての真情をいかなく伝えており、人生の智慧を授けてくれる宝庫でもあること。

これらの理由から、我々はなおさら一句一句を大切に読まなければならなかったのである。

私は、先ず最初にテキストに集録されている短編の法語の中から、梅尾明恵上人遺訓を選ぶことにした。明恵上人の、仏教に対する情熱の熾烈さを、若い人たちに知ってほしかったのである。

「あるべきようは」これがこの遺訓の別名である。

(2)

明恵上人は、法然、栄西、親譲、道元、日蓮と時を同じくして、鎌倉時代に生きた人であった。その遍歴のあとを大づかみに辿ってみよう。

九歳の時、高尾に入山してから、華嚴と密教を学んだ。五教章、探玄記、弘法大師の著作、ETC。

ある時には、読みたい仏書が手に入らず、奈良市中の東大寺尊勝院にまで借用に及んでいる。そして後年、彼は、この学頭になるのである。

後に梅尾から紀州の白上峰、筏立、糸野と住居を転じて坐禅と習学に勤めるが、たびたび紀州から奈良の各寺院に出講している。

二十五歳の頃から、華嚴の教学に関する著作をはじめた。学僧としての上人の業績は、華嚴と密教の二つの教理を融合したことにあろうか。

(3)

明恵上人の他の一面は、道者としての風格にある。

我学道する様は、諸仏菩薩は、如何仏道をば修業し給ひけんとのみ、守り居たれば、近代の学生のためには、其益もなし。

明恵上人が聖教を読む時、それは寫読を離れては考えられなかった。彼のこの学道の用心は、そのまま道元の次の言葉にも連なっている。

古人行じおける処の行履、皆深き心なり。私の意樂を存ぜずして、衆に随ひ、古人の行履に任せて行じゆくべきなり。

成忍の画いた樹上坐禅図が伝える如く、明恵は透徹した坐禅者であった。梅尾山中にある坐禅するに手ごろな岩石で、上人が坐らなかつた石は一つもなかつたと伝えられている。華嚴と密教の二つの世界観を一つに体得することが、彼の坐禅の終局の目的であった。

彼ほどの人である。興味をそそる伝説は尽きない。

(4)

紀州白上峯に閑居して、仏前に仏道成就を祈願して、右の耳を切り落したという話。幼年時代に潮って、父親が道心芽ばえた薬師丸（上人の幼名）の頭に烏帽子をあてて、「この子は見目がよいから、役人にでも育てよう」と話しているのを耳にして、見目がよくては法師になれないものかと考えて、焼ひばしを肘に当てたり、縁先からころげ落ちて、額に傷をつくろうとした話など。

これらの逸話は、上人が一途な情熱家であったことを伝えている。辻善之助博士は、かつて、日本の仏僧の中で、一生不犯の人を挙げよといわれるならば、明恵上人を挙げたいと言われた。

清僧の典型とは、彼ほどの人を指すのであろうか。

(5)

明恵上人は、われわれ浄土宗にとっても有縁の人である。

選沢集を批判して摧邪輪を記し、浄土教を邪教よばわりしたことは、新興仏教の浄土宗に対する、在来（ざいらい）の仏教徒の立場と、彼の性格からすれば至極自然であったと理解されよう。

法然上人に確固たる信念があったように、明恵にも不動の

立場があったのだから。むしろ、二人は、同じ時代に生きて、末法という思潮に真剣に取組んだ同志であり、異った方法で仏陀の教えに帰還しようとしたとさえいいうるのである。

(6)

上人の遺訓、即ち「あるべきようは」は、弟子の喜海が、折々に書き留めたものだといわれる。その冒頭の文章を掲げてみよう。

人は阿留<sup>あろ</sup>辺<sup>へん</sup>幾<sup>き</sup>夜<sup>や</sup>字<sup>じ</sup>和<sup>わ</sup>と云う七文字を持つべきなり。僧は僧のあるべき様、俗は俗のあるべき様なり。乃至帝王は帝王のあるべき様、臣下は臣下のあるべき様なり。此あるべき様を背く故に、一切悪きなり。

我は後世たすかんわと云者に非ず。ただ現世に、先あるべきようにてあらんと云者なり。

遺訓の要点は、この文章の中にいい尽されている。私が、重ねて不味い現代文に書き改める必要は全くあるまい。

「あるべきようは」とは、「あらねばならない姿は」、即ち「何々らしく」の意味であり、本来的な姿への復帰をさして

いる。ここに掲げた文章の前の部分は、明恵の既成仏教への反省であり、また社会批判でもある。

後の部分、即ち「我は後世たすからんと云々」の文章は、まさしく法然上人の浄土教への厳しい対決とみてよいであろう。

明恵がここで述べている、現実重視の態度を、現代の浄土宗の人々は、どのように受けとめたらよいのであろうか。

明恵上人がこの遺訓の中で行った既成仏教への批判は、そのまま現代仏教批判に置きかえることができる。彼は既成の仏教と社会に対する憂慮から、生涯警鐘を乱打しつづけたという感じさえする。

無住の「沙石集」の中に、明恵が高野聖に次のように語ったと残されている。

一代の聖教を年久しく見侍るに、教ふる所仮名に書かば、あるべきようはの六文字なり。

私はこの遺訓を読んでいくうちに明恵上人に対して、次のような疑問を抱くようになった。

明恵には、本来的な姿への復帰という血を吐くような批判

精神の一方に、現実をあるがままに肯定する、高次な、いわば自然法爾といった、おおらかな世界はなかったのであらうかという。そして、その解決は、彼の重厚な華嚴哲学の著書の中でなければ見出されえないことなのであろうかという。  
(以上は先の輪読会の最初に述べた話の内容である)

## 伺 御 中 暑

大本山

善光寺大本願

法主 一条 智光

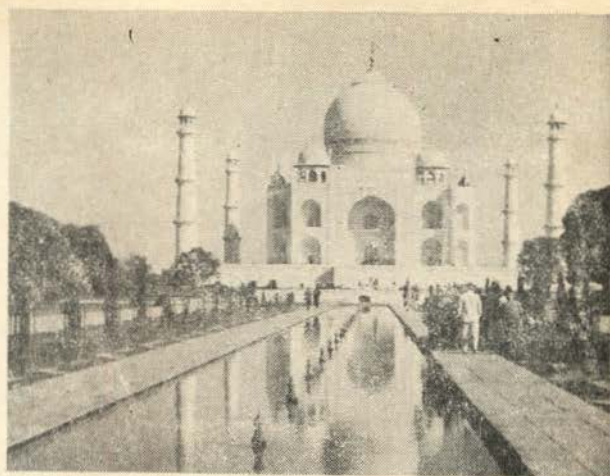
副住職 鷹 司 誓 玉

執事 早 川 利 雄

京家政短期大学

学長 三枝 樹正道

京都府宇治市瀬島町千足八〇  
郵便番号 六二一  
TEL 宇治四一〇一(代)



＜タジ・マハル＞アゲラ

戸松啓真

## インド・ネパールの旅(4)

△ブッダガヤにて▽

ブッダガヤ（仏陀伽耶）において、日本寺の起工式が無事

つとめられたのは二月十五日、ちょうど涅槃会の日であった。後で聞くとところによると、東京では、その日三十センチほどの雪が降ったそうであるが、当地では朝から晴天で、夏の法衣を着て、約一時間の野天の法要で一同すっきり日焼けしてしまった。しかし任務をはした後の解放感と、予想以上に盛大となつてしまった起工式を無事終えたという満足感で、一同の心はインドの空のように明るく晴れやかであった。

この日本寺の建てられる用地は、大塔から西へ約千米位のところで、その両隣りもラオスとシッキムの仏教寺院の建設予定地になっている。さらに麦畑の中の道路を西へ行くと、ブッダガヤ総合大学を開設するために、その校舎建築が五分通り進行していた。印度ビハール州政府はブッダガヤを仏教徒の聖地として将来国際仏教センターとするための都市づくりを進めているところである。それだけに日本寺の建設を通して日本の仏教徒に、そして日本の国力に期待するところも大きいようである。

午後は尼連禪河とスジャータ遺跡へ行く。釈尊が二十九歳でカピラ城をぬけ出して、求道のための苦行生活に入ってから六年、煩惱のもとと考えた肉体をいかに苦しめても心の平安は得られないことを知り、前正覺山におけるこれまでの

苦行をやめて、衰えた体をこの尼連禪河の清流で洗い、やがて対岸の大きな菩提樹下の石上に吉祥草を敷いて座とし、冥想と思惟とに入られたという。仏伝によると、その時、河岸の道において、やせ衰えた聖者に牛乳でいた粥を捧げた少女がスジャーターである。スジャーターはこのあたりのウルヴェルヴァー村の村長の末娘であったという。この少女はやせ衰えてはいるが、何やら高貴な修行者に、その後も当時の習慣として供養を続けたことであろう。今、私たちは乾燥期で水のなくなった尼連禪河を徒歩で渡って、スタジャーターが住んでいたという遺跡をたずねたのである。そこは河岸から百米位離れた村道に面した小高い丘で、ここも回教徒の侵入前仏教徒の手によって埋めてしまったという説明であった。その丘にのぼると、東北に前正覚山、西に尼連禪河をはさんで、ブッダガヤの大塔が見える。すぐ見には畑があり、インドの農家の庭で脱穀している様子が見えた。その様子を見てみると、釈尊当時の農家の生活も現在の農家の生活も変りないのではないかと思えるほど、貧しそうに見えた。それに引きかえ、日本の現在の生活状態を思うと、日本人の勤勉と日本の国というものの有難さをしみじみと感ずるのであった。

帰途、尼連禪河を渡ったところに、古いヒンドゥー教寺院

があり、境内の隅に石刻の釈迦像や仏足石があった。秋山氏の話しによると、昔は仏教寺院であり、ブッダガヤでは一番古いものであるが、現在ではこのようにギャクタイされていると。

レストハウスへ帰っての夕食は千代田トラベルの心づくしの日本食で、一同本日の起式工事を祝した。インドの地で食べる赤飯・おでん・みそ汁・焼のり・つくだに・日本酒の味は缶詰とはいえ格別であった。

#### △鹿野園の廢墟とガンジス河の沐浴▽

翌二月十六日午前三時起床。ガヤ駅午前四時十分発の列車に接続されたエアコンディションの特別車にてベナレスに向う。午前六時途中の駅にて朝食の差入れがあった。目玉焼、ポテトフライ、パン二切、バター、ママレード、バナナ二本、ポット入り紅茶。この車輛は四人又は二人用の特別室で、室内には寝台、洗面所、扇風機等があり、古いがなかなか豪華なもので、恐らくイギリス統治の時代に彼等が乗ったものであろう。

午前七時五〇分ムガルサライ駅着。駅前は大変な雑踏ぶり。何処へ行っても人間の多いのは驚く。ベンツなど場所こそぐわなような外車のタクシー四台に分乗して三〇分後にベナレスの「ホテル・ド・パリ」に着く。ホテルの前庭で、

繩ぬけ、人間の宙ずり、コブラの踊り、マングースの蛇食い  
ヨーガ等のインド魔術をみる。午後、ベナレスの北にあるサ  
ルナートへ行く。サルナートは現在の地名であるが、そこ  
は仏典にでてくる鹿野園がある。

釈尊がブッダガヤにおける成道後この鹿野園へきて初めて  
の説法をされたという記念すべき土地である。鹿野園の入口  
近く舗装された並木道の左側の小高い丘の上にレンガ造りの  
八角の塔がみえる。チャウガンディー塔とよばれ、釈尊が成  
道後サルナートを訪れたとき、かつて六年間苦行を共にした  
五人の比丘が迎えに出た場所である。この五人の比丘は、カ  
ピラ城を出て以来、父王の命により釈尊に従い苦行を共にし  
たが、釈尊が苦行を捨てたのを見て墮落したとして鹿野園へ  
去ってしまったのである。

複雑な気持ちで迎えたであろう五人の比丘と釈尊の出会い、  
そしてやがて語られる鹿野園の最初の説法。その内容につい  
ては、四諦八正道であり、十二因縁であり、中道であるなど  
といろいろ伝えられている。いずれにしても、人間の苦悩と  
は何んであるか、そしてそれは何故に起るのであるか、それ  
から解説するにはどうしたらよいか、ということが根本的発  
想になっていたのである。これをもとにして、後の仏教の真  
理論、人間論、修行論等は発展大成されたものである。鹿野

園で最初の説法を聞いた五人の比丘は、釈尊の弟子となっ  
た。ここに仏陀としての釈尊と、弟子となった五人の僧と、  
説かれた法との三つが整ったので、最初の仏教々団が成立し  
たといわれるのである。鹿野園にはグプタ王朝時代五世紀時  
代に建てられたという僧院の廢墟と、ダメーク塔と、アショ  
カ王柱の一部などが保存されている。廢墟とはいえ、美しい  
花や芝生があつて公園のようであり、その一隅には一九三一  
年にインド大菩提会によって建てられた仏教寺院（ムーラガ  
ンダクティ寺）がある。私たちが裸足で入っていくと、仏教  
徒の一人が石の床に坐つて参拝していた。一同坐して読経を  
はじめると、内陣にいたインド僧が、内陣と外陣の境に張つ  
てある綱をほどいて、中に入れと合図してくれた。正面には  
釈尊の初転法輪像が安置してあつた。この寺についてはどう  
してものべなければならぬことがある。それは内部三面の  
壁に、日本の野生司香雪画伯によつて、釈尊の一代記の大壁  
画が美しい色彩でえがかれているところである。野生司画伯  
は、かつて小石川淑徳女学校で教べんをとつておられたこと  
があると聞く。

鹿野園遺跡と道路を一つへだてたところに、サルナート博  
物館がある。ここには仏教関係の素晴らしいものがあるので、  
必ず訪ねる必要がある。ここにある砂岩にほられた釈尊の



尼連河畔のスジャータ造跡

初転法輪像（五世紀）は全インドの仏陀像の中で美しいものの一つで、全身にかかる衣にヒダのないのが特徴である。

それからアシヨカ王のたてた石柱の柱頭のほぼ完全に近いものがある。それは四頭の獅子が背中合せになっているもの

で、今日インド国家の徽章として採用られたもので彫刻としても素晴らしいものがある。残念なことにはここは撮影禁止である。旅行社の秋山氏が、認可をとってきましようという入口のインド人のところへ行つてすぐ戻つてきておとり下さいという。早いですねという、科山氏は笑いながら指でマルをつくつてみせた。ホテルへの帰途ベナレスの町の土産物を買つて、それぞれサリー、ショール、テーブルクロスなどを買つ

た。夕食後一行はホテルのロビーでクリシュナ嬢のインド舞踊と歌を楽しむ。

二月十七日早朝、有名なヒンドウ教徒のガンジス河の沐浴を見物に行く。日の出の時間に合せて船にのり、ガード（Gate）即ち水浴するために河岸に設けられた石段から流れに下りて朝の沐浴をしている人々をみる。沐浴場のすぐ上流には洗濯場があり、下流にはすぐ火葬場がある。日本人からみると試に不潔きわまりないが、ヒンドウ教徒にとって神聖なる河であるからい決して病氣などにならないし、なったこともないという。いまはちょうど乾燥期なので、流れは話に聞いていた程濁つてはいないで、水は青くきれいであった。インド人が小さい船で、写真帳や腕輪や地図などを売りにくる。

夕方インド国内航空機でアグラに着いたのは午後九時で、バスでローリーズホテルへ行く。ここのホテルは離れ家式になっていた。

#### △アグラのタジ・マハル▽

アグラは十六世紀から十八世紀にかけてのムガル王朝はなやかなりし頃の都で、デリーを去る二〇四軒ジャムナ河畔にある古都である。アグラは仏跡には直接関係ないが、インドへ来た人は必ず訪れる。それは「タジ・マハル」があるか



＜初転法輪の他鹿野園の遺跡＞

—左の塔はダメーク塔—（サルナート）

らだ。アグラがどこの国にあるかを知らなくても、タジ・マハルはアグラにあるということを知っている人が多いといわれる。それはインドの代表的建築としてインド人の誇るものである。十七世紀ムガル王朝のシャー・ジャハーン王が、その妃ムムタズ・マハルの死をいたんで建てた壮麗な廟である。廟といっても、それは単なる墓ではなく、総大理石の世界的名建造物であり、宝をちりばめた夢の宮殿であり、世界

で最も素晴らしい夫婦愛の記念碑である。妃は容姿美しく、伎芸にすぐれ、慈悲深い心の持主であったと伝える。王に影のかたちのごとく従い王を引きたてが、三十九歳の時王の出征につき従い陣中に病没した。その愛情は、十七年間の結婚生活を通じ

て不変であったという。

妃の死後、王はアグラ城内の一室に鏡の間を作り、どの部屋情からも妃の眠るタジマハルが見えるようにしたといわれる。タジ・マハルには同類の建築物にない一種の幻想的な抒情的な何ものかがあるといわれるのは、こんなところに由来するのかも知れない。とくに月光にはえる眺めは一段と素晴らしい。有難いことにそれを知っていた若林隆光氏が誘ってくれたのである。午後十時半若林、日比野、中山の三氏と月下のタジマハルヘタクシーを走らせる。そこで大げさに云えば二組の日本人に会ったのである。一人は松井建設の小島清氏で私たちの一行であったが、日本寺建設について州政府と細部打合せのため、昨日ベナレスで単独行動をとった後、タジマハルへ直行したのである。もう一人の日本人は羽織袴をつけた六十歳の長身の見知らぬ人で、青白く輝くドームを背景にインド人の案内人をつれて、肩をいからして歩くさまは異様なものであった。その夜の美しさは、帰国後いただいた小島氏の写真集の解説の一端を引用すれば十分である。

「ベナレスを十時に出て、車で十二時間走り通してアグラについたのは夜の十時であったが休む事なくその車ですぐかけつけた時は、折しも十八夜の月が中天にかかり、月にはえるドームは乳色に輝きその美しさは言葉にてはあらわすすべも

なく、唯感激あるのみ。」中村元博士もその昔「インド紀行」で満月の夜のタジ・マハルについて次のようにのべている。

「その美しさは拙い筆や舌をもって尽すことができない。この世のものならぬ思いをさせるといふ点では、ヴァチカン宮殿も、ケルンの大寺院も遠くタジ・マハルに及ばない」と。

翌日一行はタジ・マハルを訪ねた。この建築物は妃の死後一年たった一六三一年に着工され二十二年の歳月を要したもので、中央のドームは純大理石の二重のスクリーンを通して光が入るようになっており、その直下には妃とその後なくなつた王の美しい各種の宝石でちりばめた大理石がおさめられていた。外部の壁にもまた宝石で美しい模様がえがかれ、黒い石でコーランの一節がかかれていた。

このタジ・マハルのすぐ近くに、宮崎松記博士の救ライ病院があるので、異国の地でライ病患者のために奉仕している日本人の方々を慰問するためお寄りする。午後アグラ城、アクバル帝城等を見学の後、観光バスにてニューデリーへ向う。途中ガンダーラと共に仏像発生の地といわれるマツーラへ寄り博物館にて仏像をみる。翌日ニューデリー及びデリーの旧都跡を見学し、ガンジーの墓に参拝する。ニューデリーのパラム空港を飛び立ったのは二月二十日の午前五時であった。ルフト・ハンザ機はやがてベトナムの上空をとんでいる。スチ

ユワデスの説明によるとダナンの上空だという。地上では今日も戦闘が行われているであろう。機はしばらくすると海上に出た。雲海の切れ目から青いサンゴ礁が光ってみえる。機はジェット気流の追風にのって一路日本へ向っている。

## 追記

四回にわたって、旅行の一部を書きましたが、日程や訪問地の説明については帰国後いただいた『インド日本寺起工法要団旅程表』（若林隆光氏）と『同巡拝の記録』（小島清氏）におうところが多いため誌上をかりてお礼申し上げます。なお大変興味深く、かつ参考になりましたのは、次のものがあります。合せて推薦いたします。岸信宏『異国旅情』・中村元『インド紀行』・藤吉慈海『インド・セイロン紀行』・渡辺照宏『新釈尊伝』・天沼俊一『印度旅行記』



鹿野園のムーラガンダクティ寺の内部（左右に野生司画伯の壁画がある）

## お歌をいただく

極楽へつとめてはやくいてたは

身のをはりにはまいりつきはん

(勅修御伝 第三十一)

「つとめて」は早朝のことですが、努めてという意味にかけています。「いでたつ」は宿を出発することです。「身のおわり」は生命の終り、臨終のことですが、ここでは尾張という地名にかけています。「なん」は完了を予想した言葉です。

そこでお歌の意味は

京都を早朝に出発するならば、やがて尾張に着くであろう。そのように極楽は西方十萬億仏土のはるか遠いところにあるというけれども、早く努めてお念仏を唱える生活を続けているならば、必ず臨終に際してはみ仏の来迎にあずかり、たちまち極楽に往って生れることができるであろう。

ということになります。

仏国土は仏さまのいる国土のことであってこの意味から極楽は阿弥陀さまのいる国土が

十萬億もあるということは無限の広さということでしょう。極楽は西方に向って無限の広さの更に向側にあるというのですから、これまた無限の遠方ということになります。

それにもかかわらず經典には、ごく短い時間で極楽にゆきつくと言っています。

五逆という最も重い罪を犯した凡夫でも、お念仏を唱えれば「命終の時に金蓮華の猶し日輪の如く、その人の前に住することを見る。一念の頃のごときに即ち極楽世界に往生することを得る」と説かれています。一念の頃というのは極く短い時間のことです。その他にも仏さまの来迎にあずかって、仏さまを礼拝し、その頭をあげない内に極楽世界に往生するとか、「彈指の頃の如くに彼の国に往生す」等と説かれています。彈指の頃とは指をはじく短い時間ということです。

こうしてみると、極楽が遠いとか短いとか距離的な感覚によって考えようとすることが間違っているという外はありません。

このお歌は、若い頃から早く往生を願ってお念仏を唱えるならばという意味ですが、これまた早くからとか、晩年になってからとか

年代的に受け取ってはいけないことになります。法然上人のお詞に

「ただふかく本願を信じて念仏申さば、一念須臾のあひだに、阿弥陀ほとけの来迎にあづかるべき也」

と申されています。従ってこのお歌の意味を、早くからお念仏を申さば、命終に極楽往生できると解してはなりません。要はお念仏を相談することが大切であります。ある人が毎日の日課として六万、十万と数多くお念仏を唱えるのがよいのか、それとも数はそれ程になくても、二万、三万と唱え、しかも法に唱えた方がよいのかと質問しました。すると上人は答えられて

「凡夫のならひ二万三万をあつというとも、如法の義あるべからず。ただ数遍のおほからんにしかず、詮ずるところ心をして相親せしめんがため也。かならずしもかずを沙汰するを要するにあらず。ただ常念のためなり。数遍をさだめざるは懈怠の因縁なるがゆへに数遍をすすむる也」

と申されました。

## 維新のころの人たち

その二

大橋 俊雄

浄土宗には、行誠の最も期待していた琳瑯をはじめ、京都を追われた下の森西正寺護明、知恩院学天・上善秀瑞・黒谷金戒光明寺定円といった勤王僧が、維新の舞台裏にあって活躍していた。徳川氏の香華御宗門であり、徳川政権の保護のもとに隆盛をたもちつづけていた浄土宗は、また一面朝廷につらなる親王を、知恩院門主として奉職していた。こうした両面に縁故をもつ、即ち朱印地を幕府からあたえられていた寺院は、尊王攘夷討幕の運動が活発に展開されたとき、いずれに重心をおくべきか、その去就にまよったらしい。

しかし、堂上公家の菩提所であり、朝廷の膝下にあつて、朝廷と陰に陽に交わりをもつ京都寺院が、勤王にかたむく



琳瑯和上肖像（磯田長秋画）  
一山形 細谷行央氏蔵一

のに自然のなりゆきであつたかも知れない。松平容保が京都守護職として京都に入り、黒谷金戒光明寺に本陣をかまえたのは文久三年のことであつたが、その容保が黒谷に宿したのは、容保と住持定円が出身の藩を同じくしていたことに原因があつた。とすれば両人は入洛前から、何らかの約束をかわしていたとみてよいであろう。容保は定円にとって風雅の友であり、また生死解脱の師でもあつた。定円はのち元治甲子の戦役者の追悼を営むと共に、秀瑞は中川

宮の旨をうけて公  
 武合体に奔走した  
 知恩院学天の片腕  
 として活躍した僧  
 であり学天は明  
 治元年二月参内  
 し、新政府翼賛の  
 ために協力するこ  
 とを申し合わせ、  
 門末に令して勤王  
 証書を提出すると  
 同時に、天皇の江  
 戸東幸にあたって  
 五万円の募金を完  
 成して献上した、  
 九月には知恩院境  
 内に殉難の碑を造  
 立した。五万両の  
 募金といっても、  
 日成らずして集ま

琳瑞和上、母上におくった消息

一大 橋 俊 雄 蔵一

るものではない。とすればどこから出たものであろうか。  
 このことについては何も記されていないけれども、借金と  
 みてよいのではなからうか。借金のうち返金したものは当  
 然あったとしても、借金は利子をうみ、ついに明治も中ご  
 ろともなれば数十万円にもなり、身うごきでなくなつて  
 しまった。知恩院の苦しい不如意の生活はこうして生まれ  
 たものらしい。

こうした人たちの動きとて、討幕・公武合体、さては攘  
 夷だ開港だと、自からよいという方向に目を向けたとして  
 も、そこには時代の進みゆく流れがあり、討幕勤王をと  
 なふる反面、幕府をあくまで支持しようとする佐幕派の人も  
 おったことは事実で、世は騒然としていた。このような動  
 きのほか、しかも幕府牙城のさ中であつて、身を捨て事を  
 処したいと願っていたのが琳瑞であつた。

出羽に生れ、桑折無能寺で育つた琳瑞は、出府後行誠の  
 指示のままに東条一堂について儒学を修めたが、彼の念願  
 は浄土律の修法と宣布の道場を江戸にきづくことであり、  
 ゆくゆくは僧侶の模範となるべき律僧を養成して、宗門の  
 指導者たらしめたいということであつた。かくして安政四  
 年伝通院山内に処静律院を建立した。安政四年といえは、

日米通商条約を締結した年にあたり、尊王攘夷について人々は真剣に、しかも世をあげて論じあつていたところである。この世情を目にし耳にした青年律僧琳瑞は、じつと律院で修業することに躊躇し、『何とかして混乱している世相を救いたい、律僧の養成はそれからでもおそくはあるまい』。こう考えて次第に志士たちと深く交わりをもつようになつた。

その中には高橋泥舟・山岡鉄舟・清川八郎といった佐幕派の人もおれば、また水戸派の黒川嘉平。鈴木佐平とも交遊をかさね、時に松平春嶽や井伊直弼の屋敷を訪ねたこともあつた。松本や井伊を除く人達は時折り処静院をたずねたけれども、彼らは律院の生活にいそむ琳瑞の人格にひかれた篤信者でもあつたらしい。山岡は和上から仏法を聞いて剣法がますます上達したと彼自から語っているし、金子与三郎も薩摩藩の邸内でたおれた時、左腕の奥に和上からもらった珠数をはめていたという。和上の接した人たちの中には佐幕派の人もおれば、攘夷を旨とする人もいたし、幕府要路の人たちもいた。これらの人たちに接して、思想の一致点を冷静な態度で求めたい。若し求めることができなければ、国を挙げて世相を正道にもどすために努力すべ

きだ。そのためには広く多くの人から意見を聞かなければならないというのが、和上の考えであつた。広いつき合いの中からうかがえる和上の考えは、公武体論であつたらしい。かくて慶応三年十月十八日、和上は高橋泥舟の屋敷をたづね議論をたたかわしたが、両者の意見は対立したまま日はとつぷりと暮れ、深更に及んでしまったため、またの日を約して別れた。網代笠をかぶり、白の綿入れを身にまとい、草茶色の袈裟をかけ、念仏をとなえつつ、泥舟のつかわした齊藤安之進という青年を供にして帰院の途次、三百間坂にさしかかったとき、突如おどりでた二人の刺客のため、右の鬢から肩先きにかけて、切りつけられた七寸ほどの傷がもとでたおれてしまった。時に年三十八。

和上は、それでも最後まで念仏をとなえ、手は胸において合掌していたという。だが示寂四日前すでに、將軍徳川慶喜は大政を奉還していたことを思うにつけ、最後のとたん場になって惜しい人をなくしたものと、悔やまれてならない。

(続)

# 占いと念仏

—その二—



川上 法俊

同じお念仏の徒も、浄土宗徒と一向宗（今日真宗と称する人々）の人々のお念仏の心がけの異なる以上、占い等に対して当然その心がけの異なるべき筈ということを前回申し上げましたが、今回は前に周易が、所謂、一般の占いと大變に意味の異なることを前に申し上げておきましょう。

神社やお寺でいただくおみくじ（籤札）はまず、大部分の人々がその神様なり、仏様なりから載いたお告げとするわけですから問題はありませんが、そのお告げの結論のみで、しかもただ簡単に失する事が欠点ともいえましょう。

占星術師や陰陽五行術師は一面多少科学的ともいえましようが、四十億の地球人は同年同月同日に生れる人もおおよそぎて、ジンギス汗や秀吉が幾人も出ても困ります。ただ不正確に失するでしょう。前回申し上げた地球終滅さわざは、大方

占星術です。水昌占いとか、祈禱入神とかはその占者自身の人格が一番問題となります。かつてその当否は、大方、小事は当たっても大事は駄目なのが相場です。無理に権威を有たせようとすると、マクベスの受けたような皮肉な結果になります。マクベスは妖女イッチより女人の股より生れた者には殺されぬと予言されますが、その敵は帝王切開によって生れた男でした。マクベスは黒沢明が日本式に蜘蛛巣城として映画化しております。

この点、周易は全くその性質を異にして、四書五經といわれますが、漢書芸文志という書には批評して、易經を五經の原としています。（書經礼記詩經春秋易經。四書は大学中庸論語孟子）いわば儒教哲学のエキスというわけです。で孔子は

晩而嘉<sup>コノミ</sup>易<sup>イ</sup>章<sup>シヨウ</sup>編<sup>ヘン</sup>三<sup>サン</sup>絶<sup>セツ</sup>

と、いわれていする。(昔の巻物は竹札で革紐で編んであり、その革紐が三度切れる程読んだわけ) また、

加<sup>カ</sup>我<sup>ガ</sup>数<sup>スウ</sup>年<sup>ネン</sup>五<sup>ゴ</sup>十<sup>ジュウ</sup>以<sup>ヲ</sup>學<sup>ガク</sup>易<sup>イ</sup>可<sup>カ</sup>以<sup>ヲ</sup>無<sup>ム</sup>大<sup>ダイ</sup>過<sup>カ</sup>矣<sup>ヤ</sup>、

ともいって、大変尊重しています。学者間に種々にむずかしい論争がありますが、今はそれをさけて申しますと、支那の周の文王がまだ殷の暴王紂に美里に囚へられていた時、天下国家を心配して、大自然現象を乾<sup>カン</sup>兌<sup>タイ</sup>離<sup>リ</sup>震<sup>セン</sup>巽<sup>シン</sup>坎<sup>カン</sup>艮<sup>ガン</sup>坤<sup>コン</sup>(天沢火雷水山地)の八卦を規準にその商数八八六十四卦を定め、これに説明として卦辞を附し、後に周公旦が爻辞を付け本経が成立し、後諸学者が十本(十翼)を作りその体裁が成立したといわれます。(十翼は孔子の作といわれますが全部ではない様です)

此の制作された動機が易を支配します。これが一般の占いや占術占星術と大変異なる所なのです。易は大自然現象に基いて天文地理人文を凡て含むものですから、確かに男女間の問題から金儲けの事迄出て来るのは事実ですが、その基本がいつ迄も君子修身の道治国平天下の道を示すのが本義なのです。ただ前述の如く天運は変化して、終りには暴君紂が儻されるとも、文王の囚われる時もあり、その様な種々の変化に對して君子のなすべき道を教えるのが易であり、それを大自

然現象になずらえて説明する方法が八卦円であり算本なのです。哲学の事を形而上学といいますが、これは前述十翼中の繫辭伝ノ上に

是<sup>コト</sup>故<sup>ニ</sup>形<sup>ノ</sup>而<sup>上</sup>者<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>道<sup>ヲ</sup>、形<sup>ノ</sup>而<sup>下</sup>者<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>器<sup>ヲ</sup>、

とあるのは攝取したのです。又た同書は

易<sup>イ</sup>有<sup>リ</sup>聖<sup>ノ</sup>人<sup>ヲ</sup>道<sup>ヲ</sup>四<sup>ノ</sup>焉<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>言<sup>フ</sup>者<sup>ヲ</sup>尚<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>辭<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>動<sup>ス</sup>者<sup>ヲ</sup>尚<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>變<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>制<sup>ス</sup>器<sup>ヲ</sup>者<sup>ヲ</sup>尚<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>象<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>計<sup>ス</sup>筮<sup>ヲ</sup>者<sup>ヲ</sup>尚<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>占<sup>ヲ</sup>、

とあり易を学び弄ぶにも純学者政治家化学系者所謂易者が其の四徳の別に従ふ事を言います。辭とは易經の辭句の哲理研究、動とはその實際活用、制は少し理解しがたいのですが、八卦が前述天地自然現象に模して定められた事といいましたが、今水を見ますと横又は斜に見れば川の水を思わせるでしょう。従になら明瞭に水の字です。又た上から見れば車の四輪と車体に見えませんか。同じ水でも兌<sup>ニ</sup>沢<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>は何かの窪みにたまった水のイメージです。雷山小過という様な卦は横にして見ると鳥が飛んで居る姿をイメージ出来るでしょう。この様に八八六十四筮の象徴イメージから連想して種々の物質機械道具<sup>ニ</sup>器<sup>ヲ</sup>を作り出し衆生の役に立てるの意味が制なのです。筮は最後に置かれて甚だ卑しめられている様ですが、これが所謂易筮でなあり占いのです。左伝には

聖人不<sup>レ</sup>煩<sup>ハツ</sup>ニト筮<sup>ヲ</sup>ニだの龜焉<sup>ヲ</sup>知<sup>ハナ</sup>ニ天道<sup>ニ</sup>是亦多言矣<sup>レ</sup>だの種々へつぽこ易を卑めた文あり、又孔子も不恒其德或承<sup>ハ</sup>之<sup>ニ</sup>蓋<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>占<sup>ハ</sup>而矣<sup>ハ</sup>などいい、苟子は善<sup>ハ</sup>易者<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>占<sup>ハ</sup>などいい大變前の孔子の言と矛盾する様ですが、これは通常のなすべき事をもなさずしてやたらにお占をする様な人々への誠めなです。故に左伝は<sup>ハ</sup>以て疑を決す。疑わずんば何で<sup>ハ</sup>せむと教えています。実は左伝は占例の模範書とせらるる程で実に多くの歴史的占例を残しています。プルタゴラスの英雄伝等を御覧なさい。西洋でも古代国家は重大事はみな占いによつて決したのです。春秋の世を亦そうでしたから春秋の注釈書左伝に多くの占例があるのは当然です。尋常の道をふみ而も何如にすべきかの疑問の決し難き時に易占を求めるので面白半分や、為すべき事もなさず何か甘い事を求めるのでは易の冒瀆です。

だが前述の如く易は本来君子の為天下の為のものがら万象を含む為に男女間病氣占金儲等所謂俗易の事も戴せられてゐる事も事実で、易経の巻上の首は坤乾即ち天地のが卦説明されていますが、巻下の首は男女間の代表卦の沢山咸という卦ではじまり、十翼の一序卦伝には男女ありて後父子君臣ありと迄その神秘性を讀んでいます。だが一番困るのは此の様な万象の一面のみを捉へて何でも男女間や金儲を主にした解

釈をしたがる俗易者の人々の事で本来の易の目的天下の為が忘れられて終る事です。一般人も社会の一員たる以上分相応はその占卦に対し自分一個人の吉凶のみでなく天下と社会に關連して考える事が大事です。真言宗一派の立川流が邪教とされたのも確に大日經疏の中に青白二帝の事が述べられ獻欲の中にも真理の存在ありとしています。易も同様に天沢履の如くで解釈すれば變な事になる為です。易も同様に天沢履の如きは確かに少女中女長女共に天目の下に日光浴（裸身）をしているイメージもありますが、天下的に考えれば小人が大人に従うか従わざるか内乱有無の卦であり、地山謙は母体内に長中少男あり、男子裸身の相もありはするが、本来は謙遜の徳の卦です。山風蠱の「確かに若い男を年増女の追かける姿もあれども天下的には先代の腐敗政治を如何に革めるかの卦です。俗易書は大概之等の卦は淫事を中心にして説明しています。（乾は天とも父とも、坤は地とも母とも、震は長男坎、は中男、巽は少男、巽は長女、離は中女、兌は少女）

この為に占うには必ず占的占人を明瞭にせねばなりません。即ち一体何を占うのか。占う人の地位身分人格等です。その為には易経内には往々小人ニハ吉ナレド大人ニハ凶という機な辞もあります。大人トハ子君、小人は私利を追ふ人で願望が異なる故です。

「読者の声」

心の中に育つ大きな木



心、心とは一体何なのでしょう。一人一人が持ち合わせる心、この心は眼・耳等の感覚器官、胃・肺等の内臓器官とは異なり、各人持ち合せているにもかかわらず、これが心だという形にあらわすことのできないものなのです。

人の良し悪しを判断する際には、その人の心の持ち方によってなされるのが常です。日常の生活の中でも、この心の触れ合いによって幾多のでき事が生じ、楽しみ、よろこびを分かち合い、悲しみ、苦しさに沈むのです。この世に生れ出でた赤子は両親のあたたかい心の中に育ち、友情心、社会の理解ある心の中で生活し続けるでしょう。これらのあたたかい心にさからい、すねた人はよこしまな心となり、人生の敗北者として脱落してしまうのです。

何故、私が以上のようなあたり前なことを

記したのかと申しますと、最近の社会の流れはこの心の触れ合いという、人として最も大切なことをなおざりにしている感が強くてたまらないからなのです。一つ、一つ例をあげればきりがございません。己れ自身の欲のためには他を犠牲にしても、というようなことは日常茶飯事となりつつあり、これが社会であるかのような錯覚の中に生活しているのが私たちの生活の現状ではないでしょうか。

より豊かな生活をめざして研究開発され、蓄積されたはずの科学文明は、一方において人間本来のすがたを圧迫していることがままたまございます。更に近い将来人間を支配するともまでいわれているコンピュータ時代に至ったとしたならば、各人の心まで読み取ることさえ可能となるではありませんか。

そこまで至ってしまったのは機械的に動く情緒を持ち合せない人たちであふれ、味気のない生活様式が当り前となるかも知れません。しかし、これでよいのでしょうか。感情を持ち合せた唯一の動物として、その特徴を最大限に發揮してこそ、たのしい毎日を過すことができるものと思います。

この心を理解する上において一番分りやすく、抵抗もなく入れるものが宗教ではないでしょうか。より積極的に求める人、また表面にはあらわさなくとも潜在的に各自が持ち合せているのが宗教心であると信じます。いろいろなでき事の中で科学的には理解できなくとも、何らかの解決を出し、安堵感を与えてくれるものが宗教心なのです。人によってその答えが異なつたとはいっても、それは各自異なつた心を持ち合せているためで、何の心配もないことでしょう。それが各自に与えられた宗教心でありましょうから。

私たちの心の中に大きく育つ大心こそがこの宗教心であり、人として生き続ける限り、そのささえとして、力強く根を張ってささえてくれるのが宗教を信ずる心、宗教心ではないでしょうか。

(神奈川NH生)

## 数珠物語

# 隣人

合田 微雪



美しき月に向いてゆばりせりこの山上には  
ばかりもの無し

月清き山の上にてわが放つゆばりは太き影  
なしてとぶ

わが事をにんじんニシクと真顔で罵りし  
人を忘れざるべし

ようやくに職に就きしが鮮人というただそ  
れだけで追われし朝あり

(歌集「月陰山」尹徳作著より)

小生の知人である一韓国少年は、貧しい家  
庭に育ちながら、アルバイトをしてもという  
向学心に燃え、後に父君も奮起し、寝食を忘

れるどころか酒、煙草まで断って働いた。

かくて彼は慶大に合格、学友や下宿の人々  
からは勿論、教授連からも愛され、まだ二年  
残る卒業後の就職先も決定済みとある。何故  
に？ その秘密を打明けよう。誰に贈られて  
か彼の左腕、時計の上にもう一つ、丈夫な木  
の実製の数珠が、いつも当てられている。

今一つ、やはり同じ隣邦人の話。

頼む夫は他県へ出稼ぎにゆき、最初の頃は  
仕送りもしていたが、そのうちふつつり途絶  
えてしまった。

なさぬ仲の幼児三人を抱えた妻女は、栄養  
失調の果て頭髮は抜け、血を吐いた。

もう母子心中をするより他に道は無い。然  
し、自分はそれでよいとしても、義理ある子  
供達に申し訳ない。恥を忍び、かねて知り合い  
の某夫人を訪れ、

「奥様わたくし、乞食をしに参りました」  
とひれ伏した。夫人の目からポロポロ涙が  
溢れ出た。

「もうこうなれば社会・国家の責任どころ  
か、全人類の恥です。私は世界中の人々に代  
つて貴女に、お詫びと償いをさせていただき  
ます」

と幾らかの金を握らせ

「残り物ですが」

とこの人達の好物である漬物等を与え、

「それから結核にはこんな食物では駄目、栄養のある物、そのうちでもこれが一番」と冷蔵庫からバターを取り出し、

「これからも度々、いつでもお困りの時いらして下さい。ご遠慮なんかなすっちゃ嫌ですよ」と繰返し激励した。

半年過ぎて、意外と経過もよく、彼女の体はほぼ回復をみた。夫人は、

「一度ご主人を尋ねて行ってみられては!」  
といい、

「でも、そのなりではご無理ね。どうせ私にはハデになりましたから」

と自分の着物をも差出した。

かくて夫は連れ帰ったが、二号と同棲していたので、妻妾同居のはめとなった。が、こうした事は彼国では別段珍しくない風習だといふ。

然し清らかな夫人の生活態度は、これらの人々の心に身に、美しく滲透していった。間もなく如何がわしい女性は去り、夫婦は新しい職を求め、他県へ希望の旅立ちをした。

そうして十年。今春正月突然夫人の家の玄関に、右夫婦の運搬自家用車が横付になっ

た。あれから血みどろな精進により、建築関係の事業を始め、今では多くの人も使用しているという。

「奥様が無かったら、私達とつくに死んでいました」

と落涙する母親の側から、口を揃えて、

「そうです……そうです」

と瞳を輝かせる子供達も、今や見違えるほど大きく健康に、成長していた。

もう一つキラキラ光る物がある。婦人の腕に水晶の数珠。見れば夫人の腕にも全く同じ物が。途端二人は美しい笑顔の交換をしたが、みんなその意味をよく知っている。

(小説の如き結末だが、あく迄も実話である)

小生の一従兄は終戦直後朝鮮大邱から引揚げたが、その際荷物を減らし、愛犬を連れて帰国した。無欲、仏の再来の如き貴方なればこそと、彼国人に混って渡航、彼地の人々から私に大歓迎を受け、引揚時永遠の記念にと一たん進呈した品々を身に付けられるだけ返され、別離を惜しまれ、再び引揚者として

帰国した。

その妹夫婦も京城からの引揚者だが、夫人の在鮮時代親しかった一韓国婦人からの便りの一部をここに紹介しよう。

「……奥様はご病氣とか、お側で看護できません身を悲しく存じます。でもいつかお国日本をお訪ねしてご恩報しがし度うございます。どうぞそれまで生きていて下さいませ。」

お国の十二月の「アサヒグラフ」に私の写真が載りますので、ご笑覧を……」

小生にとっても朝鮮、殊に京城は第二の故郷と考えている。もう三十年の昔、僅か数年間の思い出に過ぎぬけれど、懐かしく生涯忘れ難い。そして、

この拙文の冒頭の悲歌を、折にふれて口誦している。

### 「お知らせ」

今回の郵便番号制の実施により本会の区域は「一〇二」となりました。お問い合わせ、原稿投稿等の際にはそのように明示して下さいませ。

# 施

施とは、インドの言葉では旦那（だんな）という。旦那寺とか、旦那というのがそれである。

施とは、一般に、「ほどこし」とよんで、物をほどこすことと思われるが、本来は三輪清浄といって、施した人と、施された人と、それを取りつぐ「物」との三つが、施したとも、施されたとも意識しない状態においておこなわれる施でないと、不浄であつて、清浄でないと考えられている。

施には、第一に、色施というのがある。これが、一般にいう施であるが、色とは物質のこと、形のあるもの、色彩のあるものをい

うのであつて、これに、財施と自身施と眷族施との三つがある。

このうち、財施は金銭物品に関することであり、あとの二つは、自分および家族の努力に関することである。

しかし、多くは、財施についてのみを「ほどこし」といっていて、努力などについては何もいっていないようであるが、努力もまた形の上にあらわれるものであるから、「財施」もしくは「色施」のなかに含まれるわけである。

つぎに、法施というのがある。よくお寺のことを「旦那寺」といい、その寺に所属する



在家のことを「檀家」といっているが、これは、檀家がお寺へ、財施をなし、お寺が檀家へ法施をなすので、ともに檀那であるというのである。法施は、精神的な利益のことを意味するのである。

第三に、無畏施である。無畏施とは、畏れなきことを施すこと、すなわち「安心感」をあたえることで、観音さまを「施無畏」といっているのは、観音さまが世間の悩みの声をきいて、「われを念ぜよ。われは汝等の友である。われを念ずれば、その悩みは解消するであろう」とよびかけておられるからである。

大 谷 学

それは、かならずしも観音さまにかぎったことではない。親でも、兄弟でも、友だちでも、相談相手となつて、「悩み」を共に悩んでくれば、その悩みは、いくぶんでも解消できるから、一分の「無畏施」がおこなわれたわけである。

信仰は、自分の生命に関して、絶対の安心があたえられるものであるから、そこに「無畏」を得たわけであり、その点、阿弥陀さまは、本当の無畏施をおこなつておられるのである。

○

まえの「三輪清浄」というのは、施す品物に関して、当事者の間に、「施した」とか、「施された」とかという観念を伴わないで、品物の授受もおこなわれる「施」でなければ、本当の施ではない、といわれている。

わたくしたちの行う施には、かならず、施の観念が伴っているから、これは、わたくしたちの常識で考えているような状態のものではなく、なにか違ったものに相違ない。なにがあるだろうか。それともありえない

ものだろうか。

釈尊が在家の人びとに、常に施されたということから、一般の生活のことに違いはない。

「自身施」ということなどは、ジャータカというお経に、釈尊の前生の苦しい修行のことについて説かれているなかに、いろいろ述べられている。雪山童子が四句の偈を聞くために、鬼に自分の身体の内を提供した話や、餓えた虎に自分の身を投じた話など、施というものを修行の一つとして、大変重くかんがえ、大変むづかしいものにしてしまったのである。

しかし、一般には、施ということについては、もっと一般生活の場において、語られたものであらう。

たとえば、物を売買する商売についてみて、物に対して、若干の値段をつけ、それによつて、品物のやりとりをしている。しかしその値段というものは、決して、物、このものの正しい値段ではない。

一枚の紙にしても、一個のコップにしても

また一枚のハンケチにしても、その定められた代価だけでできるものではなく、みな金にもかえがたい天地の「恩物」であつて、本当の価値からいえば、実に「無比の宝」である。

お客が店にきて、代金をはらつて、品物をうけとり、お店の人は、品物と代金を交換して、双方、これを売買した、とおもつてゐる。

これは、日常あたりまえの風景であるが、しかし、これは、実に、ほんのわずかな手数料で、天地の宝を差上げたのである、いただいたのであるから、そこに立派な「施」がおこなわれているのである。

そして、そこには、「施」の観念を伴っていないところの「三輪清浄」のすがたが、素直にあらわれているのである。

それ故に、商いとしての心得かたは、品物の売り買いではなく、天地の宝物をおとりつぎしているのであつて、決して暴利をむさぶるような考えをおこしてはならないである。

# 和訳三部経

## 無量壽経 (6)

### 仏の光明・浄土の莊嚴

村瀬秀雄



#### 一 光明は三毒を消す

次いで釈尊は阿難尊者に、み仏の光明について説いた。

「無量寿仏の光明は、勝れた徳をもっている。その尊さは第一のもので、他の仏たちのとうてい及ばないものである。

み仏の光明は僅かな狭い所も照すし、また地域が広くなればなるほどいくらでも広い場所を照してゆくので、結局のところ広さが一仏国土に及んでも、十分に照していることになる。そればかりでなく、百の仏の世界を照らすし、千の仏の世界を照らす。このようにして東西南北のあらゆる方向にある無数の世界をくまなく照らしている。

こうした理由から無量寿仏のいとを無量光<sup>1</sup>、無辺光<sup>2</sup>、無礙光<sup>3</sup>、無对光<sup>4</sup>、解王光<sup>5</sup>、清浄光<sup>6</sup>、歡喜光<sup>7</sup>、知恵光<sup>8</sup>、不断光<sup>9</sup>、難思光<sup>10</sup>、無称光<sup>11</sup>、超日月光<sup>12</sup>と十二の異称を

以て呼びたてまつる。

もし人がこの光明に俗することができれば、もしその人の貪りと怒りと愚かさ<sup>13</sup>とが立ち所に消え去って、身も心もおだやかになり、内には悦びが満ち溢れ、自然に善心が起ってくる。もし地獄、餓鬼、畜生の惡道におちて苦しんでいる人がこの光明に照らされたならば、たちまちその人の苦しみ<sup>14</sup>がやみ、再び苦しみを受けることがない。更にその人が惡道での寿命が終った時には、その人は悟りを開くことができるようになる<sup>15</sup>。

無量寿仏の光明は清らかな輝きをもつて十方世界を照し、どの仏国土にあつてもこの光明の優れていることが知れわたっている。私はいまこの仏の光明を称讃しているが、これは独り私ばかりでなく、一切の諸仏、声聞<sup>16</sup>や縁覺<sup>17</sup>、多くの菩薩たちも同じく讃歎している。もし人々がこの仏の光明に優れた功德のあることを聞いて、真実の心から日夜に仏の光明を讃えてやまないならば、その人には願ひの通りに四方安樂國に往生することができ、多くの菩薩、声聞その他から称讃され、その功德を讃歎されるであらう。そしてその人が仏

となつた時に発する光明もまた十方の諸仏、菩薩たちから称讃されることは、あだかも無量寿仏の場合と同じであらう。

私が無量寿仏の光明について、いかに優れているかを説こうとしても、たとえば、昼夜一劫の間にわたって努力しても、説きつくすことができない位に勝れているのである

## 註

1 無辺光に際限なく広く照す光明という意味で、法然上人は次の通り説かれた。

「無辺光とは、ただ光明のみ無量なるにあらず。その所照の処もまた辺際あることなし。故に無辺光仏というなり（逆修説法）」

2 無礙光は遮られることのない光明という意味で、法然上人は次の通り説かれた。

「無礙光とは、この世界の日、月、燈燭などの光の如きは、もし障礙あれば即ち照旺すること能わず。しかるに彼の仏の光は、十方の世界に徹照せずということなし。もしそれ然らざれば、即ちこの世界の念仏の衆生は、彼の仏の光摂を棄ることを得ざるべし」（逆修説法）」

3 無対光は他に比較するものがなく勝れた

光明という意味。

4 炬王光は火炎のようにさかんな光明という意味。

5 清浄光は人々を清浄にする光明という意味で、法然上人は次の通り説かれた。

「清浄光とは人師積して曰く。無貧の善根より生ずるところの光なりと。貧に二あり。婬と財となり。清浄とは凡そこの光明に触る者は、かの二貧を除く。貧を不浄と名づくが故に、清浄を以て光明に名づくるなり。もし戒に約すれば、不婬戒と不慳貧戒にあたる。まことにこれ法蔵菩薩の昔の不婬、不慳二戒の功德より生ずるところの光なり。故にこの光に触る者は、即ちこの二つの貧欲の罪を滅するなり（逆修説法）」

6 歡喜光は人々に歡喜の心を与える光明という意味で、法然上人は次の通り説かれた。

「歡喜光とは、これはこれ無瞋の善根より生ずるところの光なり。久しく不瞋戒をたもち給ひしが故に、この光を得給えり。この光に触る者は、瞋の悲罪を滅す」（逆修説法）」

7 智慧光は人々に智慧を得させる光明という意味で、法然上人は次の通り説かれた

「智慧光とは、これはこれ無痴の善根より生ずるところの光なり。久しく一切の智慧を修して、愚痴の煩惱を断尽し給ひしが故にこの光を得給えり。この光は即ちよく愚痴の罪を滅す（逆修説法）」

8 不断光は断絶することがない光明という意味。

9 難思光は仏以外のものと考え得られない光明という意味。

10 無称光は仏以外のものに説明できない光明という意味。

11 十二の異称があるので、無量寿仏を十二光仏とも申し上げる。

12 惡道におちて苦しみを救うということとは、故人の追善供養に大きな功德があるということである。法然上人は次の通りに説かれた。

「なき人のために念仏を廻向し候へば、阿弥陀はとけ光りを放ちて、地獄餓鬼畜生をてらし給ひ候へば、この三惡道にしみて苦を受くるもの、そのくるしみやすまりて、

いのち終りてのち、解脱すべきにて候。大經に曰く。若在三途勤苦之処、見此光明、皆得休息、無後苦惱、壽終之後、皆蒙解脱（もし三塗勤苦の処にあつて、この光明を見たらまづれば、みな休息を得て、また苦惱なく、壽終の後みな解脱をこむる）といへり」（或人のもとにつかはす御詞）

13 声聞（しょうもん）は仏の言葉または遺教を聞いて、煩惱を断ずるよう修行する者のこと、小乗修行者。

14 緣覚（えんがく）は師によることなく自力で修行し、因縁の方則を学んで悟りを開くようにする者、小乗の修行者。

## 二、無量の壽命

釈尊は阿難尊者に、み仏の壽命について説かれた。

「また無量壽命の壽命が長久であることは教えあげることができない。阿難よ、汝はどうしてみ仏の壽命の長さを知ることができない

い。たとえ十方世界の無数の人々がみな人身をうけて、このごとく声聞緣覺の修行を終りその人々が一所に集会し、妄念を静め一心に智力をつくして、百千万劫という永い間かけて計算したとしても、み仏壽命の長さを知ることができない。

これと同じく淨土にいる声聞や菩薩や天人その他の壽命もまた計算してもとうてい数えきれない長さをもっている。

また淨土の声聞や菩薩は数え切れる程沢山いて、とうてい説きつくすことができない。たとえば大目犍連のような大弟子が百千万億にのぼる多人数いたとして、それらの人が力を合せ生涯を通じて計算し続けたとしても、淨土の声聞や菩薩の数は数え切れないものである。それは一本の毛を割いて百分し、その細い先端に水を滴たらしとして、この極く微量の水を大海の全ての水と比較したとすれば、大海の水がいかに多いかが判るのであるが、このような譬えをもつてしても、声聞や菩薩の数を知ることができない。

## 三、淨土の莊

淨土には七宝の樹が一面に生い茂っている。これらは金の樹であり、銀の樹であり、瑠璃の樹であり、破瑠の樹であり、珊瑚の樹であり、砮磲の樹である。またある樹は二宝からなりたち、三宝からなりたち乃至七宝からなりたっている。

或は幹は金であり、銀であり、瑠璃であり、破瑠であり、珊瑚であり、砮磲であつても、それらの葉や花や実は他の宝からなりたっているものがある。或いは根は金であり、葉は破瑠であり、花は珊瑚であり、実は砮磲であるというように、根や幹や枝や葉や花や実がそれぞれ異つた宝からなりたっているものがある。このように樹々は七宝のいろいろな組合せによつてなりたっている。

こうした多くの宝樹は整然と列んでいる。そしてどの宝樹も幹とが互に揃い、枝と枝とは順序よく、葉と葉とは向き合い、花と花と

はよく並び、果実と果実とは釣り合っている。宝樹はいずれも新鮮な色つやに輝き、美しく光るので仰ぎ見られない思いがする。

樹々の間に時々清風が吹き抜ける。その度に枝がゆれ動いて音をだし、正しい音階を奏するように鳴る。この自然の音楽は微妙であつて、調和した高低をたもっている。

無量寿仏が悟りを開かれた菩提樹の高さは二千万杵に及び、根もとの周りは八千杵の太さがあり、枝や葉は八十万杵にわたって茂っている。この道場樹も一切の宝の合成によつてできている。この宝は衆宝の王といわれる月光摩尼や持海輪宝で飾られ、小枝にはみな宝の飾りが垂れ下っている。また珍妙の宝網が樹の上を覆っている。これらの寶石は百万種類の色があつて、見事に輝き、しかもみな調和がとれている。

微風がゆるく吹いて枝や葉を動かし、その音は妙法を説いている。この音はもろもろの仏国土に流布し、これを聞くものは深法忍を得るので、悟りを開くまで耳に障害がなく、よく法を聞くことができる。目にこの樹の色をみ、耳にその音を聞き、鼻にその香りを知

り、舌にその味をなめ、身にその光りを触れ心に妙法を想えば、その人もまた深法忍を得る。この人は六根が清浄に徹し、いろいろの悩患をうけることがなくて成仏できる。

もし浄土にいる人々が道場樹をみたならば三法忍を得るであろう。これは一つに音響忍<sup>3</sup>、二つに柔順忍<sup>4</sup>、三つに無生法忍である。人々がこの智慧を得るに至る理由は無量寿仏の徳のためであり、本能力のためであり、満足願<sup>5</sup>のためであり、明了願<sup>6</sup>のためであり、堅固願<sup>7</sup>のためであり、究竟願のためである。

浄土で聞くことのできる音楽は、世間や天界で聞かれる音楽よりも千億万倍も勝れている。七宝樹から聞える音の一つといえども天界の音楽の千億倍も勝れている。また浄土には自然に多くの伎楽が奏でられていたが、この伎楽とてもみな法音であつて、清らかな調子と微妙な優雅な音をもっている。

これは十方世界の音声の中で最も勝れたものである。また浄土には七宝の講堂、精舎、宮殿、楼閣があり、真珠その他の寶石で飾られた幕が張りめぐらされている。建物の前後左右に水浴をする池があつて、小さな池でも

十四間の大きさがあつて、大きな池は百千四間に及ぶ。池の縦横と深さはみな同じである。池の中には八功德水が充ち溢れ、水は清浄であり、香りが高く、甘露のような味がする。

黄金の池には底に白銀の粒が敷きつめられ、白銀の池には底に黄金の粒が敷きつめられている。このように池はそれぞれ七宝によつてつくられている。

1 深法忍は三法忍のこと。

2 六根は眼、耳、鼻、舌、身、意の六感覺を通して知る働き。

3 音響忍は音声は聞えるが、それは実のものであると知る智慧のこと。

4 柔順忍は対象は無生であると知る智慧のこと。

5 無生法忍は諸法の生滅去来することがないように諸法を知る智慧のこと。

6 満足願は一切の願いを満足させている願という意味で、本願のこと。

7 明了願はたのめば必ず救われることが明了な願ということ、本願のこと。

8 堅固願は何にも動ない堅固な願ということ、本願のこと。

# 同 御 中 暑

西福寺

稲岡 覚 順

川口市北町二ノ五〇

郵便番号 三三二

浄土宗宗議會議員

井原 文 雄

山口県柳井市柳井津 瑞相寺

郵便番号 七四二

浄土宗保護司会理事長  
浄土宗議會議員知恩院顧問

栗本 俊 道

東京都文京区大塚五二二一〇

西信寺

電話 九四一〇六二八

郵便番号 一一二

京都黒谷  
西住院住職

戸川 靈 俊

京都市左京区黒谷町三〇

電話 (七七一)〇七〇五

郵便番号 六〇六

聖光寺住職

小林 忍 戒

京都市下京区寺町仏光寺上ル

郵便番号 六〇〇

浄土宗宗議會議員  
蓮勝寺住職

柴田 敏 夫

横滨市港北区菊名町五二二

郵便番号 二二二

浄土宗宗議會議員  
光運寺住職執

飯田 信 弘

四日市市中區三

郵便番号 五二二

浄土宗議會議員  
浄土宗新聞主幹

白幡 憲 佑

横滨市南区久保山 光明寺

郵便番号 二二二

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和十三年七月二十五日 印刷

昭和十三年八月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二五九四四番

横濱東京八二一八七番

# 伺 御 中 暑

総本山 知恩院

門主 岸 信宏

執事長 鶴飼隆玄

浄土宗宗務庁

大本山 増上寺

法主 椎尾弁匡

執事長 里見達雄

大本山 百万遍知恩寺

法主 神居琳応

執事長 清山善信

大本山 光明寺

法主 大野法道

鎌倉市材木座六ノ十七  
電話〇四六七(2)〇六〇三

郵便番号 二四八

浄土宗宗務支所

支所長 新谷寛応

東京都文京区小石川三二四一六  
伝通院住職

大河内隆弘

電話 (814) 三七〇一

郵便番号 一一二

梅窓院

中島真孝

中島真哉

港区南青山二一六—三八

郵便番号 一〇七

里見達雄

鎌倉大仏殿

高德院

住職 佐藤密雄

インドに「日本寺」を建てましよう

祐天寺住職

巖谷勝雄

目黒区中目黒五二四—五三

(七二二) 〇八一九

郵便番号 一五三

常光寺住職

大谷隆雄

品川区上大崎一—十三〇

郵便番号 一四一

蓮光寺住職

戸田恭善

文京区向丘二一三八—三三

郵便番号 一一三

近竜寺住職

松濤弘道

栃木市万町二二—四

電話 (〇二八二) 〇八〇二番

郵便番号 三二八

# 伺 御 中 暑

大阪市天王寺区上之宮町二六一二

郵便番号 五四三

上宮学園

小林大巖

神奈川県葉山町堀内五六八

杉田義俊

郵便番号 二四〇〇一

静岡県富士宮市東町三ノ二八

大頂寺 石井真峯

電話(五四四) 六一三四六五番

郵便番号 四一八

華陽院住職

堀田良謙

静岡県市日吉町二一二  
電話(五二二) 三六七三番

郵便番号 四二〇

明治天皇明石行在所  
光明寺

山口諦存

兵庫県明石市鍛冶屋町五六

郵便番号 六七三

善光寺参詣のお宿  
信仰と清遊の殿堂

薬師会館

長野市松代町

小布施弘学

電話 松代(三) 三六七四番

三重県四日市市六呂見町観音寺中

記主禅師鑽仰会

岸 覚 勇

郵便番号 五一〇

だん王法林寺

信ヶ原良文

京都・三条大橋東

郵便番号 六〇六

港区芝公園第五号地十九番

天光院

真野竜海

郵便番号 一〇五

京都市東山区古門前通東山線西入  
株式会社 安藤法衣仏具店

代表取締役 安藤宇助

電話 京都(075)

(561) 0690 (541) 9041 法衣  
(561) 2402 (541) 3058 仏具

夜間専用(561) 5078  
便郵番号 六〇五

東京都港区芝西久保巴町一〇六  
大本山増上寺御用達

野村桂造法衣店

電話(四三二) 〇四二八番  
便郵番号 一〇五

法然上人鑽仰会